

大高定時便

大村高 校
定時制



「挨拶、掃除、時間」は生活の基本

第二学期始業式

八月二十五日(金)に第二学期の始業式が多目的室で行われました。原校長が不在のため、代理として林教頭が生徒へのメッセージを伝えました。

一学期、様々な場面で生徒の皆さんが責任をもって係の仕事をしっかりやり遂げる姿には、頼もしさを感じました。「時を守り、場を清め、礼を正す」の学校スローガン「時間、掃除、挨拶」については、学校だけでなく会社やアルバイト先で身に付けておかなければならない基本中の基本です。これが身に付いている人は、どんな集団にいても周りの人から信用されます。これまでできなかった人、心当たりのある人は、この二学期中に身に付ける努力をしてください。そして卒業するまでにしっかりと磨きをかけてください。(メッセージの内容より)



平和学習会

八月九日(水)に予定していた平和学習でしたが、台風接近のため中止となりました。講師の先生のご厚意により、九月一日(金)に延期し実施することになりました。当日は、本館五階、視聴覚教室において講演を聞き、最後に生徒会が中心となつて平和宣言を宣誓しました。今年度の平和学習は、長崎平和推進協会会員で語り部の清野定弘先生を講師にお招きし、先生自ら描かれた絵画を見ながら悲惨な体験の数々をお話ししていただきました。爆心地より遠く離れた深堀村の寺で遊んで被爆されたお話を臨場感があり、会場にいた全員が引き込まれる内容でした。途中で、清野さんのお姉さんが当時記された日記の一部を生徒代表が朗読する場面もあり、記憶に残る平和学習会となりました。また、会場の通路には生徒が作成した平和標語が掲示され盛りだくさんの会となりました。講演後、生徒を代表して四年生の上妻さんが、お礼の言葉を述べ、会を閉じました。



平和人権宣言

昨年一月、核保有五か国の首脳は「核戦争に勝るはいない。決して戦ってはならない」という共同声明を世界に発信しました。しかし、その翌月にはロシアがウクライナに侵攻し、核兵器による威嚇を行い、世界に戦慄が走りました。

この出来事は、核兵器の使用が「杞憂」ではなく、「今ここにある危機」であることを世界に示しました。世界に核兵器がある限り、人間の誤った判断や、機械の誤作動、テロ行為などによって核兵器が使われてしまうリスクに、私たち人類は常に直面しているという現実を突き付けたのです。

今年五月に広島で開催された先進国首脳会議でも、核兵器の恐ろしさを再確認し、核軍縮と非拡散に全力で取り組むことに共同声明がなされましたが、その一方で、核兵器の保有国による軍縮にはまだまだ課題が残されています。私たちは、核兵器が存在する世界で生きることの危険性と矛盾を指摘し、核兵器廃絶に向けた具体的な行動を起していかなければなりません。

本日、私たちに講演をしてくださった清野定廣さんは、8歳の時に被爆されました。爆心地を通り、道ノ尾駅まで歩いたときに見た残酷きわまりない光景と、多くの死傷者たちの痛恨の叫び、爆心地近くにいたにもかかわらず奇跡的に無傷だったお姉さんが、一週間後に放射線傷害を発症し、わずか一ヶ月後にこの世を去った無念を後世に伝えるべく活動を続けられています。被爆者の平均年齢は八十五歳を超えました。私たち大村高校定時制の生徒は、被爆体験を次世代に語りつなぐ若い世代の代表として、核や戦争、命の尊さについて学び、絶えず核廃絶の声をあげることが誓い、これを平和人権宣言とします。

長崎県立大村高等学校校定時制 生徒会

学級役員任命式

九月一日(金)平和学習会終了後、第二学期の学級役員任命式が行われました。各クラスの役員が呼名された後、代表して一年生平田さん、二年生中村さん、三年生射場さん、四年生森智さんにそれぞれ学級委員の任命状が、原校長より手渡されました。

第二学期は「もみじ祭」などの学校行事があります。学級委員を中心に各役員も力を合わせてクラスをまとめて最高の文化祭になるよう願っています。



これからの主な行事

- 中間考査 十月三日(火)～ 十日(火)
- 答案返却 十一日(水)
- 短縮授業 二十日(金)～
- もみじ祭 二十一日(水)
- もみじ祭会場設営 二十五日(水)
- もみじ祭 二十六日(木)
- もみじ祭 二十七日(金)

つぶやき

「つぶやき」のコーナーは紙面の都合上今回はお休みします。

長崎県高等学校定時制通信制 生活体験発表長崎県大会

高校生らしい発表に感動



十月一日(日)佐世保市、相浦
 コミュニティセンターにおいて長
 崎県高等学校生活体験発表長崎県
 大会が行われました。県内十校か
 らの代表が、これまでの経験やこ
 れからの自分の在り方などについ
 て、参加者全員が堂々とした態度
 で発表しました。今年の発表会は、
 新型コロナウイルスの影響で四年ぶ
 りに観客を迎えて緊張感もあつた
 せいか、例年よりもハイレベルな
 発表会となりました。

今年は十五名の発表で、本校か
 らは校内発表会で優秀賞を獲得し
 た四年生の相田さんが出場しまし
 た。相田さんは、「全国大会を目
 指したその先に」と題して、約六
 分間の発表を澁刺とした態度で行
 いました。授業が終わった放課後、
 体育館などで練習してきた成果を
 充分に発揮した発表となりました。

「全国大会を目指したその先に」
 「相田君も、バドミントンの練習に参
 加してみない?」
 クラスの担任で、バドミントン部の
 顧問でもあった先生から声をかけられ
 たのは、二年生の秋ごろでした。
 小学生のころからサッカーに打ち込
 んできた私は、高校でもサッカー同好
 会に入りましたが、部員は私を含めて
 二名しかおらず、練習は不定期で、顧
 問の先生を交えながら行う、ほそぼそ
 としたものでした。

もともと運動が好きなのは、それで
 は物足りず、アルバイトが終わってか
 ら登校するまでの空き時間や、下校後
 の時間を使って、ランニングなどを
 行っていました。担任の先生が私をバ
 ドミントンの練習に誘ってくださった
 のは、そのことをご存じだったからで
 した。

私がバドミントンのラケットを握っ
 たのは、サッカーができないう日のト
 レーニングになるという軽い気持ちか
 らでした。しかし、私の高校生活は、
 この日から大きく変わっていくのです。
 バドミントンの練習は、考查期間中を
 除いたほぼ毎日、行われました。五名
 しかないメンバーで広々とした体育
 館を使いますので、フルに活動するこ
 とができます。しかも、下校するのは
 夜の十時過ぎです。全員がアルバイト
 をしていたので、私たちは疲労困憊の
 状態で学校を後にしていました。その
 ような練習環境が合っていたのでしよ
 う、私は次第にバドミントンにのめり
 込むようになりまして。

やがて三年生になりました。私は、
 環境さえ整えばまたサッカーに打ち込
 みたいと思っておりましたので、所属
 先は変えませんでした。しかし、メン
 バーが三名になってしまったバドミン
 トン部から、定通大会の助っ人の要請
 を受けたのです。

まだまだ未熟な私が、そんな大きな大会に
 参加することには不安がありました。しかし、
 メンバーのうちの二名はクラスメイトです。
 彼らが団体戦に参加できるようにしてあげた
 い。参加すべきか、それとも固辞すべきか。
 葛藤を続けているとき、高校入試の際に書い
 た作文の内容の一部が、ふと私の頭の中をよ
 ぎりました。

「私はスポーツでよい成績を残して、この学
 校に貢献したい。」もう二年も前のことす
 ので、記憶は曖昧ですが、確か、そのような
 ことを書いた覚えがあります。そして、思っ
 たのです。今がその時ではないかと。私は、
 定通大会への参加を決めました。そのときの
 様子は、昨年度にこの場でお話ししましたの
 で割愛しますが、不本意な結果で、私は初め
 ての定通大会を終えました。

その日から私は、放課後の活動をバドミン
 トン一本に絞りました。そして、自分の力不
 足で敗れた悔しさを心に刻み、それをモチ
 ベーションにして、ただひたすら練習に励み
 ました。部員たちは、「顧問の先生を全国大
 会に連れて行くぞう」を合い言葉にし、きつい
 練習を乗り越えました。

一年が経ち、最後の定通大会が近づいてき
 ました。勝ちたいという思いが強すぎて無理
 をしたあまり、私は大会の二週間前に足首を
 負傷してしまいました。そのため、焦りや緊
 張がますます募り、昨年の敗北のシーンがフ
 ラッシュバックすることもありました。そし
 て、迎えた大会当日。今回は個人戦にも出場
 します。すさまじい緊張で、まるで胃を締め
 付けられているような吐き気を催しました。
 体もガチガチに強張っています。それでも、
 一回戦は何とか自分のペースに持ち込み、勝
 利することができました。しかし、二回戦は
 思いどおりのプレーができず、競り出したも
 のの、負けてしまいました。敗戦のショック
 を引きずらないよう、気持ちを切り替えて、
 今度は団体戦に臨みました。一回戦、二回戦、
 準決勝と順調に勝ち進み、迎えた決勝戦。昨
 年と同じように、一対一で私の出番が回って
 きました。相手は個人戦で負けた学校だった
 ので、リベンジマッチです。

一セット目を先取して勢いに乗れたと
 思いましたが、ケガの痛みもあって思う
 ように足が動かず、接戦の末に二セット
 目を落としてしまいました。次は最終セ
 ットです。これで全国大会に行けるかど
 うかが決まります。私は、顧問の先生や
 仲間から教えてもらったことをすべて出
 し切って、プレーしました。しかし、わ
 ずかに力及ばず、もう少しというところ
 で負けてしまいました。私は、悔しさと
 申し訳なさでいっぱいでした。私は人目
 もはばかす大粒の涙を流し、ただただ
 ごめんという言葉を口にして、その場に
 立ち尽くしていました。

大会後に、顧問の先生と選手が集まっ
 て、最後のミーティングが行われました。
 私たちにねぎらいの言葉をかけてくださ
 る先生の目には、涙が浮かんでいました。
 話を聞きながら、私はこれまでの一年半
 を思い出していました。先生は、私の勝
 ちたい、うまくになりたいという熱意に、
 いつも応えてくださいました。先生と二
 人で練習したことも、何度もありました。
 私は本当に、本当に優勝して先生を全国
 大会に連れていってあげたかったです。し
 かし、まだ足りないものがあつたのですよ
 う。あと一步、あと一步だったのですが、
 その夢を叶えることはできませんでした。
 先生の涙を見ると、悔しさがますますこ
 み上げてきました。

私は、この一年半の体験を通して、気
 づいたことがあります。それは、私たち
 が情熱を傾ければ傾けるほど、先生方は
 親身になって考え、動いてくださるとい
 うことです。そして、先生方の熱意が、
 私たちに新たな熱量を与えてくださると
 いうことにも。このような関係を、社会と
 出ても築けるのかどうか、私には分
 かりません。もしかすると、二度とない
 のかもしれません。

最後に、今この場にきてくださったとい
 る顧問の先生に、感謝の言葉を伝えたい
 と思います。「井手先生、私に濃密な高
 校生活を過ごさせてくださり、本当にあ
 りがとうございました。」